2009年6月14日
BLOG

今回は、これまでのこのブログと全然違ったことを書く。
いま、正直言って、私はすごく悩んでいる。なんで、こんなに先の見えない時代に生きているのか、どうしても納得がいかない。日夜、今後どうなるのかと思うと、夜もぐっすり眠れない。
そんななか、ハワイアンの『ハナレイ・ムーン』を聞いた。すると、気分がすごく楽になって、悩んでいることが急にバカバカしく思えるようになった。
で、今回は、その『ハナレイ・ムーン』について書くことにした。

昨年の１１月から、家内がハワイアンダンス、つまり「フラ」の教室に通い始めた。『ハナレイ・ムーン』は、最近、家内が習い始めた「フラ」の名曲である。
甘い調べ、シンプルな歌詞。聞けば聞くほど、うっとりする。頭の中に、ハワイの光景が広がり、すべてを忘れさせてくれる。
おそらく、以前にも聞いたことがあるはずだが、そのときといまとは心の状態が違っていた。だから、今回はすんなりと心に入ってきたのだと思う。

ハナレイは、もちろん地名だ。ハワイ諸島のひとつ、カウアイ島の北部にある美しいビーチが、ハナレイ・ビーチである。
最初、タイトルを聞いたときは、オアフ島のハナウマと勘違いした。家内が「ハナウマでなくハナレイよ」というので調べたら、なんとカウアイ島だったので、驚いた。

カウアイには以前1度だけ行ったことがある。娘が11年生のとき、ハワイの新聞に格安のアイランド・クルーズの広告が載っていたので、思わず申し込んだ。
申し込んだのは夏。娘が行っていたサマーセッションが終わった頃のこと。娘と家内は、毎年、夏の2カ月間をハワイで暮らしていて、娘のサマーセッションが終わる頃に、私は休暇を取ってハワイに行くのが習慣になっていた。
が、その年は娘がもう11年生だったこともあり、これで、家族でハワイに来るのは最後になるかもしれないと思っていた。そんなおりに、たまたま、その新聞広告を見つけたのだった。

ところが、クルーズは12月だった。だから、格安なのだ。なんだ、そうかと思ったが、私は迷わずすぐに申し込んでしまった。そして、帰国してからお金を貯め、その年のクリスマス前に休暇を取ってハワイに行った。
ホノルルのアロハタワー脇のポートから、家族で大型のクルーズ・シップに乗り込み、その冬、はじめてオアフ島以外のハワイの島々を旅した。

カウアイは1泊だけだった。だから、ビーチリゾートのポイプやオールド･プランテーションタウンのコロアなどの南部の観光スポットを巡り、さらに東に進んで、ワイメア･キャニオンまでは行った。
しかし、北部のプリンスヴィル・エリアには行かなかった。天国のビーチと言われるハナレ

イ湾は、このカウアイ島の北部プリンスヴィル・エリアにある。

　これは、今回、調べて初めて知った。
　また、ハナレイ湾がミュージカル映画『南太平洋』で伝説の楽園・バリハイとして描かれたことも、あのエルビス・プレスリー主演の映画『ブルーハワイ』のロケ地だったことも、私は今回初めて知った。

　ハナレイビーチ（http://jp.kauaidiscovery.com/area/princeville.htmより）

　ハワイはたしかに楽園だ。成田発の夕刻便に乗ると、朝、ホノルル空港に着く。空港の税関を抜け、外に出た瞬間、いつも思うのは「やっと戻ってきた」ということ。そして、思い切り南国の空気を吸い込むと、体の中に、東京ではけっして味わえない感覚が広がっていく。
　この感覚は、ハワイにいる限り続く。

　私は、これまでハワイに最長3週間しかいたことがない。だから、長期滞在している人に言わせると、「本当に不幸だね」ということになる。
　というのは、1週間ではまだ東京が気になり、残してきた仕事のことを考える。2週間になると少しは考えなくなるが、まだ気になる。ただし、3週間を過ぎると、もうどうでもよくなる。
　このどうでもよくなってからのハワイが、本当のハワイ、本当の天国だというのだ。
　金融危機でウォール街が崩壊するまで、NYの金融マンたちは猛烈に働いていた。東京でも、外資金融のサラリーマンを筆頭に、日本人サラリーマンはみな猛烈に働いていた。
　だから、NYでは、有名なジョークが生まれた。

　ある日、NYの金融エリートがコンベンションでカリブの島にやってきた。コンベンションの合間に、ビーチに出て一息ついていると、原住民の男がやってきて、こう聞いた。
「あなたの夢はなんですか？」
　そこで、彼はこう答えた。
「実績をあげて早くマネージングディレクターになることさ」
「なぜ？」
「なぜって、そうなるとボーナスもたくさんもらえるし、お金持ちになれるからね」
「なら、そのお金でなにをしたいの？」
「そうだね。ここに別荘を建てて、ビーチでゆっくりしたいね」
　これを聞いて、原住民の男は、驚いてこう言った。

「それなら、私は生まれたときからずっとしているけど……」

　大不況になったうえ、活字メディアの崩壊という時を迎え、いままで自分はなんのために仕事をしてきたのだろうか？と、日々考える。先日、旅行誌の『TRNSIT』で、本当にサラリーマンをやめ、太平洋の孤島でたった一人で暮らしている男の記事を読んだ。

　『ハナレイ・ムーン』の歌詞は、次のとおり。

　　Hanalei　Moon

When you see Hanalei by moonlight
You will be in Heaven by the sea

Every breeze, every wave will whisper
You are mine don’t ever go away

Hui:
Hanalei, Hanalei moon
Is lighting beloved Kaua'i

Hanalei, Hanalei moon
Aloha nô wau iâ 'oe

（訳）
ハナレイの美しい月を見れば
海辺の天国にいると思うでしょう

そよ風や波のささやきは　貴方は私のもの、
永遠にどこへも行かないで…

ハナレイ、ハナレイ・ムーン
美しいカウアイ島で光り輝いている

ハナレイ、ハナレイ・ムーン
すごく愛しているの

　この訳はネットから拾ったが、誤訳である。何種類か訳があるようで、いくつか見たが、誤訳が多いのには驚いた。まず、「When you see Hanalei by moonlight」を、「ハナレイの美しい月を見れば」としているところから違う。というのは、見ているのは月でなく、月の光の下のハナレイ湾だからだ。

　そこで、自分なりに、以下のように訳してみた。

　　ハナレイ・ムーン

月明かりの下のハナレイを見るとき

あなたは海辺の天国にいる

そよぐ風、寄せる波のすべてがささやく
貴方は私のものよと、
だから永遠にどこへも行かないで…

ハナレイ、ハナレイ・ムーン
いま月の光に輝く　最愛のカウアイよ

ハナレイ、ハナレイ・ムーン
私は貴方を愛している

　高校生の頃まで、詩人になりたいと思っていた。父親は作家だったが、人生経験がない若い自分にはストリーなど書けないと思った。それで、詩なら書けるだろうと、作詞帳をつくり、毎日、詩を書いていた。
　当時の私が憧れたのは、24歳で逝った天才詩人、立原道造だった。彼の「のちのおもいに」は、いまでも暗唱できる。
　そのなかの一節、「・・そして私は　見て来たものを　島々を　波を　岬を　日光月光を　だれもきいてゐないと知りながら　語りつづけた……」に磁石のように惹かれた。
　こんなふうにして、一生、見たものを語り続けられたら、どんなに幸せだろうと思った。

　『ハナレイ・ムーン』を聞いて、なぜか、立原道造の詩をいくつか思い出した。とくに、「のちのおもいに」のこの一節が、ハナレイ・ビーチのように思えてきた。
　いつか、ハナレイ・ビーチに行きたい。そして、そこに最低3週間は滞在し、毎夜、月明かりの下でビーチを歩いてみたい。すでに、青春ははるかに過ぎたが、まだ私の中に、過ぎし日に確かに持っていた「ポエジー」があるかどうかを確認したい。

のちのおもひに
立原道造

夢はいつもかへつて行つた　山の麓のさびしい村に
水引草に風が立ち
草ひばりのうたひやまない
しづまりかへつた午さがりの林道を

うららかに青い空には陽がてり　火山は眠つてゐた
・・そして私は
見て来たものを　島々を　波を　岬を　日光月光を
だれもきいてゐないと知りながら　語りつづけた……

夢は　そのさきには　もうゆかない
なにもかも　忘れ果てようとおもひ

忘れつくしたことさへ　忘れてしまつたときには

夢は　真冬の追憶のうちに凍るであらう
そして　それは戸をあけて　寂寥のなかに
星くづにてらされた道を過ぎ去るであらう